

AUG. 2024 Vol.30

神奈川県立歴史博物館 

Newsletter of the
Kanagawa Prefectural
Museum of Cultural History

だより No.2



千葉県指定 菩薩面 浄福寺

列島の鎌倉御家人と中世仮面—特別展「仮面絢爛—中世音楽と芸能があらわす世界—」を楽しむために—	2
120年目の不安—コレクション展「横浜正金銀行」の開催にあたって—	6
THE けんぱく PUNCH 博物館休館のお知らせ	8

中世仮面が語る地域音楽史

平安時代後期の院政期以来、京都の朝廷や大寺社を中心に鎮護国家・護国法会的手段として営まれた日本の音楽（以下、管絃・舞楽・謡物の総称の意味で用いる）は、国衙や地域寺社が受け皿となって地方へ伝播し、やがて都市や村落のなかで芸能と結びつきながら根付いていきました。地域寺社での楽所設置の他に朝廷出身の楽人の下向を伴うことでも、列島各地へ音楽儀礼が波及します。法会と舞楽が一体となりつつ中央の神楽・田楽・舞楽などが受容され、宗教儀礼の荘厳化と地域の宗教秩序が作り上げられました。つまり、日本中世、とくに平安・鎌倉期の音楽は、朝廷から列島各地へと場を移しながら地域的展開を遂げていく点に顕著な特徴が認められるのです。しかし、こうした地域音楽の歴史を語る文献史料は決して多くなく、ややもすれば、史料が豊富に残る京都や畿内近国の貴族社会を中心とする音楽史ばかりがこれまで描かれてきたのではないのでしょうか。

ですが、各地に残された中世仮面の存在から、その地域音楽の残滓を認めることは可能です。美術史研究者の野間清六や芸能史研究者の林屋辰三郎の指摘によれば、舞楽面の遺品の分布は、畿内近国内の東大寺・四天王寺・法隆寺に限らず、相模国の鶴岡八幡宮・尾張国の熱田神宮などにおいて、舞楽を行うための楽所機構が備わっていたことを示すといえます。音楽に関わる地域文献史料がなくても、かかる舞楽面の存在は、地域音楽の歴史を探る上で大きな手懸かりとなるのです。

ただし、留意しなければならない点もあります。古面に限らず、寺社の宗教儀礼に使われる種々の用具は、継承される過程で破損や修復を伴い、またそれをい用する社会集団の変容にも左右されて、意味づけや多様な解釈が上書きされて現在に至ったものばかりです。また伝播という空間的な広がりの中なかでは、地域の生活世界や秩序において、モノ本来の意味とは異なる形で受容と継承がされる場合もあるでしょう。その結果、中世仮面の遺品から中世音楽の実態そのものを明らかとする作業は困難を伴います。その一方で、以上の事情は、こうした古面にはモノそのものが歩んだ地域の歴史と記憶が幾重にも被覆されていることをも示唆しているのです。ここに中世仮面を、それが用いられた地域社会の文脈で読み解く必要性が生じるのであり、その変遷の中なかにも地域音楽の展開を知る手懸かりが秘められているのです。

本展は、このような課題意識のもと、中世仮面の分析を通じた地域音楽史の“発見”を目論んでいます。そして、とくに鎌倉期の列島各地へ音楽を広めた存在として、音楽文化に親しみ、それを支配の道具として利用した鎌倉御家人、つまり武士の存在を想定しています。小稿では、主に鎌倉御家人との関わりが深い中世仮面を取り上げ、仮面の裏側で蠢く権力者たちの姿をご紹介します。

鎌倉幕府の音楽文化形成と地域勢力

武家権門として鎌倉の地に開かれた鎌倉幕府では、源頼朝の時代に京都から音楽文化を積極的に受容しました。鎌倉音楽文化の中心は、建久2（1191）年に



【図1】重要文化財 菩薩面
鶴岡八幡宮



【図2】重要文化財 舞楽面
散手 鶴岡八幡宮



【図3】重要文化財 舞楽面
貴徳鯉口 鶴岡八幡宮



【図4】静岡県指定
王の舞面 津毛利神社

楽所が創設された鶴岡八幡宮寺であり（『鶴岡社務記録』）、幕府草創期には京都から朝廷所属の著名な楽人が招請されつつ、御家人たちへの音楽教習も行っていました。招請された楽人のなかには鎌倉に定着した者もあり、彼らの系統は弘安4（1281）年の鶴岡遷宮で催された舞楽・御神楽において、鎌倉楽人として活躍しています（『弘安四年鶴岡八幡遷宮記』）。鶴岡八幡宮寺の場合は、頼朝によって招請された京都出身の楽人を中心に音楽とその教習の環境が整備されつつあったのです。鶴岡八幡宮には、鎌倉時代初期の制作とされる菩薩面一面と舞楽面六面が現在伝世しており（【図1】～【図3】）、近世後期には菩薩面・舞楽面が合わせて三十三面あったといえます（『集古十種』）。これらの中世仮面は、まさに源頼朝による音楽受容政策の有り様を物語る音楽資料です。

その一方で、源頼朝が音楽受容を行った時期とほぼ同時期の中世仮面として、静岡県浜松市の津毛利神社に残される王の舞面【図4】があります。戦前まで現地では、神輿に先行する露払いの鼻高面として地域の芸能で使用されていたため、民俗芸能の王の舞に関連させた名称が付けられています。しかし、同社の明治期の宝物記録には「古面」としか記載されておらず、王の舞との関連は窺えません。むしろ、額のシワや口をへの字に結ぶ様子などから、舞楽の左方舞で使用される散手の仮面に形姿が酷似します。これを鶴岡の【図2】舞楽面 散手と比較してみると、額に浮き出た血管や凹凸に富んだシワの表現など、細部が非常に優れており、制作時期は【図2】と同時期のものか、あるいはさらに遡る可能性もあります。

この仮面を伝世する津毛利神社は、中世では四十六所大明神として遠江国頭陀寺莊（浜松市南区頭陀寺町周辺）に属していました。この頭陀寺莊には、建久3（1192）年に安田義定という人物が同莊の惣検校職（莊園現地の最高責任者）に就いていたことが分かっています（「守覚法親王御教書土代」）。安田義定とは甲斐源氏の出身で、河内源氏出身の源頼朝とは遠縁にあたり、かつ武家の棟梁となるだけの血統をも備えた人物です。義定を含む武田氏・一条氏ら甲斐源氏は、治承・寿永の内乱でいち早く甲斐国から南下し、平氏勢力を駆逐し、遠江・駿河両国の実効支配を進め、さらに上洛を遂げて後白河院からの信頼を勝ち取っていきます。安田義定は遠江国を実効支配し、さらに後白河院はその支配を追認して彼を遠江守に任じ、また鎌倉幕府からは守護にも補されています。義定は在京活動を展開し、京都文化に触れ本拠の甲斐国では南都仏師による造像も行われています。遠江国でも国府周辺での

大般若経転読事業を進め、守護として国内社寺の復興も幕府から任されていました。頼朝が鎌倉の地盤を安定化させてようやく上洛を果たすまでに、甲斐源氏の安田義定は京都政界と結び、かつ国内の文化事業を進めていたのです。しかし、後に義定は源頼朝によって肅清され、歴史の舞台から退場を余儀なくされます。

現地の津毛利神社に残された王の舞面【図4】は、まさに遠江国司・守護にして、頭陀寺莊の惣検校職にあった安田義定の文化事業の一環として制作された中世仮面ではないか、と現時点では推定しています。

武士本拠における迎講の流行

阿弥陀来迎を悲願する人の許へ、仮面や衣装で阿弥陀三尊・聖衆に扮した人々が訪れることで来迎の有様を演出し往生の助業とする迎講（二十五菩薩来迎会、練供養とも）は、平安時代の末期頃から次第に列島各地で営まれるようになりました。この宗教儀礼は、「構弥陀迎撰之相、頭極楽莊嚴之儀」（『法華験記』）と表現され、極楽往生の理想世界を宗教演劇により具現化するものでした。今日、行道面（迎講や種々の供養会での「行道」で着される仮面）に属する平安時代末期から鎌倉時代の菩薩面が各地に現存することは、こうした迎講の歴史的・地域的な拡がりを雄弁に物語りましょう。

鎌倉でも迎講は実施されました。例えば、先の一面だけ伝世する鶴岡の【図1】菩薩面は、かつて十二面存在しており（『集古十種』）、迎講では二十五菩薩の行道があったことを踏まえるに、この員数は迎講で使用された可能性が高いでしょう。初期鎌倉幕府で迎講が催されていたことを示す貴重な資料です。

鎌倉周辺では御家人たちによる迎講の実施も認められます。房総半島の千葉県君津市にある建暦寺には、鎌倉時代前期制作の菩薩面四面が伝世し（【図5】）、近世縁起から迎講で使用されていたことが分かっています。中世の建暦寺は上総国周西郡に属し、鎌倉幕府草創までは上総一族の支配領域でした。しかし上総広常が頼朝によって誅殺された後は、幕府吏僚の中原親能一族が進出しています。中原親能は頼朝周辺の人材のなかで最も京都政界や文化に通暁した人物であり、京都賀茂社の齋院次官という役職にも就いていました。なおこの賀茂社の神宮寺百万遍知恩寺では現在も二十五菩薩練供養が催されています。建暦寺の菩薩面は、京都文化に知悉した中原親能一族がもたらした迎講の遺物と理解されましょう。また相模国三崎莊（三浦市三崎）では、安貞3（1229）年に幕府宿老の三浦義村が行った迎講が著名です。「竹御所并武

州室令出三浦三崎津給、是駿河前司義村可構来迎之儀由、依申之』（『吾妻鏡』）とあり、幕府関係者を招き、走湯山浄蓮房を招請して盛大に開催しています。また当時京都で、迎講の最先端を走る摂津国四天王寺の日想観に則った迎講も模倣しており、三浦一族の文化力を幕府や他の御家人たちに誇示した、ある種の政治的パフォーマンスであったことも想像されます。迎講は単なる極楽往生を希求する宗教儀礼という訳ではなく、それを政治の道具として利用しようとする武士たちの思惑も裏で蠢くのです。

広島県三原市米山寺には、鎌倉時代前期制作とされる菩薩面六面と天童面二面の計八面の行道面が伝世しています（【図6・7】）。これらの行道面群は、同寺所蔵の近世縁起類の記述に拠ると、相模国出身で幕府宿老土肥実平の子孫の、当該地を本拠とした鎌倉御家人小早川茂平（実平の子息土肥遠平の時期より名字を「小早川」と名乗る）による「練供養」（迎講）の創始が語られており、同氏との関連が窺えます。米山寺はかつて安芸国沼田荘（広島県三原市）に建立された小早川氏の氏寺です。遠平が平家没官領として獲得した後、

建永元（1206）年に遠平が孫の茂平へ「沼田荘惣地頭・公文・検断沙汰」（『小早川家文書』）を譲与しています。茂平の時期から沼田荘の本格的な開発が進められ、米山寺が建立されますが、現地では在来勢力沼田氏との対立や、他の小早川一族との紛争を多く抱えた状態でした。そうしたなか、在京経験が豊富で、かつ京都の當麻寺二十五菩薩練供養をよく知る橘逸勢とも知人関係にある茂平は、この迎講を家祖土肥実平の顕彰を目的に導入し、かつ自分自身が迎講のなかで往生を遂げたとするストーリーを上書きして喧伝するようになっていきます（「東廬山米山寺由来記」）。迎講の実施は、後発勢力として新天地に進出してきた小早川氏の、領主支配を支える重要な宗教イベントとして創造されたのです。

中世仮面は流転する

建長2（1250）年の創建と伝わる千葉県香取市の浄福寺には、三十三面の仮面群が伝世し、近世まで「鬼舞」（鬼来迎とも）が行われていたことが知られています（【図8・9】）。鬼舞とは地獄の責苦と亡者の救



【図5】千葉県指定 菩薩面 建曆寺



【図6】広島県指定 菩薩面 米山寺



【図7】広島県指定 天童面 米山寺



【図8】千葉県指定 閻魔大王 浄福寺



【図9】千葉県指定 奪魂鬼 浄福寺



【図10】国指定重要無形民俗文化財「鬼来迎」の様子 広濟寺



【図 11】千葉県指定
菩薩面 浄福寺



【図 12】舞楽面陵王
高部屋神社



【図 13】昭和 8（1933）年の雨乞いの身支度

済をモチーフとした仮面演劇で、地獄に墜ちて苦しむ亡者を観世音菩薩が救済してくれる様子を上演することで仏教への帰依をすすめることを目的としています。千葉県の旧下総国の東部周辺には鬼舞の仮面群や民俗芸能が残り、浄福寺のほか成田市のこうしょうじ迎接寺にも仮面群が伝わり、横芝光町の広濟寺では現在でも「鬼来迎」（国指定重要無形民俗文化財）が毎年催されています（【図 10】）。

さて、浄福寺の仮面群を詳細に調査してみると、江戸時代に制作された閻魔王や悪くしょうじん俱生神・善くしょうじん俱生神、だっせいき奪精鬼・だっこんき奪魂鬼など多数の鬼面のなかに、鎌倉時代の制作と推定される菩薩面が複数含まれていることが分かりました（【図 11】）。浄福寺の鬼舞は、同寺を建立したりょうちゆう良忠上人が建長 4（1252）年に、自身が持つえしん恵心僧都作の十二菩薩面と獄官・獄吏の鬼面を用いて創始したと縁起に記されています（「鬼来迎問答脚供養」）。この縁起は正和 5（1316）年に浄福寺十一世良光が書写したものを寛政年間（1789～1801 年）に写したものであるため、縁起の内容自体は鎌倉時代末期まで遡ります。仮面群から窺える制作年の差違を踏まえると、浄福寺では良忠による菩薩の行道を中心とした迎講が最初に整備され（残存してはいませんが、鬼面もあったのでしょう）、近世になるにつれて、当初の迎講の要素よりも地獄の獄官や鬼を多く登場させ、亡者が責苦に遭う様子を劇的に演出し豊富な地獄変相の劇に仕立て上げられていった過程が窺えます（「鬼来迎問答引接脚供養記」）。この良忠を招いたのも、縁起の記述に拠れば千葉一族の粟飯原あいはらたねひで胤秀とあり、鎌倉御家人が宗教者の伝道と迎講の実施の受け皿になっていることが分かります。浄福寺の鬼舞は、中世の宗教儀礼から近世の民俗芸能へと変成していくなかで、そ

こで用いられる仮面を変化させながら現在に至っているのです。

当初、舞楽面や行道面として用いられていた中世仮面たちは、地域社会のなかでモノ本来の意味とは異なる意味が新たに付与されて、民俗芸能や地域信仰のなかで再利用されていきます。なかには音楽とは異なった文脈で使用される中世仮面も登場します。神奈川県伊勢原市のたかべや高部屋神社には、室町期の舞楽面りょうおう陵王【図 12】が伝世していますが、こちらは戦前まで雨乞い儀礼のなかで使用されていました（【図 13】）。本来であれば龍を頂くはずの頭部には、近世の補修でウサ耳に改変されており、すでに陵王としてのモノ本来の意味が喪失してしまっている状態がよく窺えます。

中世仮面の履歴を紐解けば、地域音楽史の歴史だけでなく、仮面を取り巻く時代を超えた人々の心性にまで触れることができます。本展では、優美で、怖ろしく、また滑稽な仮面たちのオモテ側だけでなく、そんなウラ側もぜひご堪能下さい。

（学芸員・渡邊 浩貴 わたなべ ひろき）

特別展 仮面絢爛

—中世音楽と芸能があrawす世界—

開催概要

会期：2024 年 10 月 26 日（土）～ 12 月 8 日（日）

休館日：毎週月曜日

〔11 月 4 日（月・祝）は開館〕

会期中に作品・資料の展示替えを行います。

120年目の不安 —コレクション展「横浜正金銀行」の開催にあたって—

はじめに

当館の旧館部分は、旧横浜正金銀行本店本館という歴史的建造物です。この建物は今年、創建120周年を迎えます。そこで、コレクション展「本店本館創建120周年記念 横浜正金銀行」を企画しました。

横浜正金銀行は、第二次世界大戦が終わるまで日本を代表する国際金融機関であり、五大陸に160を超える店舗をもつ大銀行でした。その本店本館として1904（明治37）年に創建された建物は、後に東京銀行横浜支店となり、1967（昭和42）年からは神奈川県立博物館の旧館部分として使われました。さらに、1995（平成7）年には神奈川県立歴史博物館へとリニューアルされて現在に至ります。

当館は、この日本を代表する近代建築を引き継いだ経緯から、横浜正金銀行に関する資料の収集に取り組んできました。東京銀行や東京三菱銀行（現三菱UFJ銀行）、そして行員の同窓組織である正友会から寄贈された資料は、銀行の歩みを理解するうえで不可欠なものです。また、そこに勤めた銀行員のご子孫に寄贈いただいた資料からは、世界各地を飛び回り、金融の最前線で活躍した人たちの動向が見てとれます。

さらに、近年では、この建物を保存しながら将来にわたって活かしてゆくための研究が進められています。本展は、創建120周年を迎える建物の魅力と、この銀行に携わった人たちの姿について、当館の収蔵資料を通じて紹介しようとするものです。

銀行と建物の歩み

まず、横浜正金銀行とは、どのような銀行なのでしょう。その特徴は、名前に示されています。「横浜」は、この銀行の本店が置かれた都市であり、世界に開かれた貿易の窓口です。また、「正金」とは紙幣以外のお金、つまり金貨や銀貨等を指します。1859（安政6）年の開港後、横浜では外国と日本の商人との間で貿易品の取引が盛んに行われるようになりました。当時、外国との取引には銀貨が使われていましたが、紙幣との間に価値の差が生じて問題になっていました。これに対し、銀貨を供給して格差を解消するために、正金を専門に扱う銀行が求められました。そこで、1880（明治13）年に設立されたのが横浜正金銀行です。1887（明治20）年に、ほかの銀行と役割を明確に分けるため

に横浜正金銀行条例が定められると、外国為替を主な業務とする特殊銀行として位置づけられました。

横浜正金銀行は、世界各地に支店を置いて国際金融機関としての業務を展開するとともに、1899（明治32）年には本店の新築工事に着手しました。設計・監督を担った妻木頼黄は、明治時代の日本を代表する建築家の一人です。工事は5年4か月に及び、1904（明治37）年7月に竣工しました。また、8月8日には新築落成式が開かれています。それから120年、この建物は1923（大正12）年の関東大震災や、1945（昭和20）年の横浜大空襲といった災禍をくぐり抜けて現在に至ります。

当館所蔵の横浜正金銀行に関する資料の多くは、関係機関のご協力を得て集められたものです。横浜正金銀行の国内業務を引き継いだ東京銀行からは旧横浜正金銀行調査部図書（約1万冊）を、また東京三菱銀行からは、国内外の貨幣・紙幣（約1万2000点）をご寄贈いただきました。さらに最近では、正友会から100点以上の資料をご寄贈いただいています【図1】。

最前線で活躍した銀行員とその家族

次に、横浜正金銀行にはどのような銀行員たちが勤めていたのでしょうか。世界を渡り歩き金融の最前線で活躍するためには、お金の計算に詳しいだけではなく、語学に堪能であったり、各国の要人たちと交流を深められる文化的な素養を持っていたりする必要もありました。また、銀行員に同行して海外生活を送る家族も多くいました。

当館では、これまで横浜正金銀行員のご子孫から数



【図1】 創建時の横浜正金銀行外観写真 正友会寄贈



【図2】今川家のトランクケース 八木宏美氏寄贈

多くの資料をご寄贈いただきました。近年、収蔵されたものの一つに、今川義利氏とご家族の資料が挙げられます。今川義利氏は、1917（大正6）年に横浜正金銀行へ入行し、アジアを中心とする海外支店に長く勤務すると、1945（昭和20）年6月からは取締役を務めました。寄贈資料に含まれるトランクケース【図2】は、世界各地を移動した一家の動向を象徴的に示すものです。また、今川義利氏のご長女である八木和子氏は、父の転勤に伴って各地に滞在した経験を一冊の本にまとめています（八木和子『ある正金銀行員家族の記憶』港の人、2019年）。東京や横浜、ロンドンをはじめとして、上海・大連・瀋陽（中国）、コルカタ（インド）、スラバヤ・ジャカルタ（インドネシア）での暮らしが生き生きと記されていて、銀行員自身だけでなく家族の様子を知るうえで貴重な記録です。

同書には、横浜正金銀行本店のエピソードが残されていました。今川義利氏が1937（昭和12）年に瀋陽からコルカタへ転勤となった時のことです。一家は瀋陽から帰国しますが、父だけ先行してコルカタへ向かいました。一方、残された家族は、横浜に滞在してインドへ向かう準備をします。そして、一家の荷物は、荷造り用の大きな木箱に詰め込まれると、出港前に横浜正金銀行本店の地下室へ運ばれました。

その時の荷物の一部は、後に当館へ寄贈されて、現在は再びこの建物で保管されています。一家の資料と旧横浜正金銀行本店本館は、約90年ぶりの再会に驚きつつ、旧交をあたためているのかもしれませんが。本展では、同様に様々なご縁を通じてこの建物に集められてきた資料をご紹介します。

建物の不安と安心

ところで、この建物自身は、創建から120年が経過した現在を、どのように感じているのでしょうか。人間の一生を超える時間を過ごした建物の気持ちを理解するのは容易ではありません。2回目の還暦ですから、

もちろん喜んでいるでしょう。しかし、想像をたくましくすれば、うれしい反面で不安も感じているのではないのでしょうか。銀行時代は金庫にお金を、博物館になってからは収蔵庫に博物館資料を保管してきた建物は、常に緊張感を持ち続けてきたに違いありません。特に、博物館になって以降、収蔵庫は手狭になり、頻発する大規模災害への対応も求められています。そのような不安に向き合うため、当館では2016（平成28）年から空調設備等の改修工事を実施するなど、対策を講じてきました。さらに、2025（令和7）年1月から再び改修工事のため休館を予定しています。

建物の現在と未来を巡る取組は、当館だけに留まりません。近年では、横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院で建築学を専門とする先生や都市イノベーション学府の大学院生の皆さんに、学外演習でこの建物を研究対象にいただいています。本展では、2021（令和3）年から進められてきた実測調査の成果等をご紹介します。

翻って、この建物の不安については、これまでも節目節目で解決が模索されてきました。例えば、県立博物館から県立歴史博物館へのリニューアルにあたっては、建物の大規模改修が実施されています。その際の報告書では、将来を展望して、「旧横浜正金銀行本店本館である旧館に展示や保管の重要な役割を担わせず、その不足する機能や施設については新規の建築物に集約させ、できるだけ本来の姿に戻し、公開する」というビジョンが示されています（神奈川県教育庁生涯学習部博物館開設準備室編集協力『重要文化財旧横浜正金銀行本店本館 復元の記録』国設計ほか、1995年）。30年近く前の当時から、いますぐできるわけではない、と付言されているとおり、実現には多くの困難が伴う発想です。一方、建物の不安と本気で向き合うためには、このような大胆さも必要でしょう。

この建物が安心を得るためには、広くその魅力と課題を知ってもらう必要があると考えます。本展がその契機の一つになるよう、切に願っています。

（学芸員・武田 周一郎^{たけだ しゅういちろう}）

コレクション展 本店本館創建120周年記念 横浜正金銀行

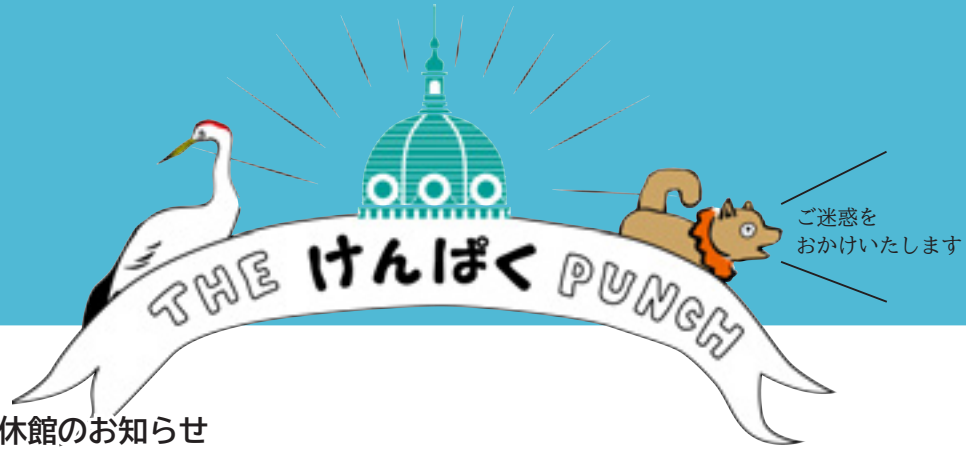
開催概要

会期：2024年11月9日（土）～12月22日（日）

場所：1階コレクション展示室

休館日：毎週月曜日、12月10日（火）

会期中に作品・資料の展示替えを行います。



博物館休館のお知らせ

神奈川県立歴史博物館は、2025（令和7）年1月～2026（令和8）年9月まで休館を予定しています。当館は国指定の重要文化財である歴史的建造物「旧横浜正金銀行本店本館」を活用した博物館です。旧館部分の建物が竣工したのは1904（明治37）年。大正時代の関東大震災を経て復旧工事が行われ、1967（昭和42）年に神奈川県立博物館となり、1995（平成7）年からは神奈川県立歴史博物館にリニューアルして保存活用されてきました。博物館として開館後57年が経過し、老朽化対策を行いながら、適切に建物を管理・運営し、未来に継承していくことが当館の大きな使命の1つとなっています。また、博物館としての機能を充実させ、来館者サービスに対応する必要もあります。



■なぜ休館するの？

休館中に、エレベーターの更新、展示室照明のLED化、放送設備の更新、その他老朽化した設備等の修繕や更新を予定しています。

■休館中の博物館活動

休館中も資料の収集・保存、調査研究、学習支援（館外での行事・学校への出張講座・地域連携等）、情報発信、図書資料の整備・発信等、さまざまな活動を続けていきます。具体的な内容については、当館ホームページやSNS、フライヤー、博物館だより等でお伝えしてまいります。どうぞお楽しみに。

■再開館に向けて

休館中の調査研究成果を発揮した特別展や、常設展においても一部展示替えを行い、新たな魅力を発信してまいります。また、工事を経て、さまざまな人が学び楽しめるだれでも利用しやすい博物館、「来てもらい、また来てもらう博物館」を目指します。

皆様にはご迷惑をおかけしますが、ご理解を賜りますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

発行：神奈川県立歴史博物館 <https://ch.kanagawa-museum.jp/> X・instagram @kanagawa_museum

〒231-0006 神奈川県横浜市中区南仲通5-60 TEL 045-201-0926 FAX 045-201-7364

発行日：令和6年8月16日 印刷：株式会社 TAKT・JAPAN

※本誌画像の無断転載を禁じます

